



ミケランジェロの丘（筆者撮影）

念願のフィレンツェを初めて訪れたのは真夏の七月中旬で、京都と奈良を合せたような静かなるべきこの「花の古都」も観光客にあふれ、中世紀からそのままの狭い路筋は現代のメデイチ家取りの派手なアメリカ人の行列が続くといった皮肉にもとれる騒音に驚いて、涼風が立ちはじめた九月の中旬、人の波も一応引いた頃を見計らって再び憧れのフィレンツェの客となった。美術史で深く脳裡に焼つけられている数々の名作が競っているフィレンツェでの旅情はルネッサンスの甘美なうたげに酔ひしびれた蘆生の夢の様気がする。

フィレンツェの饗宴

— 山内壮夫 —

海に陸に翼を搏つフィレンツェの息ぶきは街中にあふれ至るところで「此処こそフィレンツェの真髓か」と瞳目しひたすに感激する始末であった。フィレンツェの駅に立つとその真前にサンタ・マリヤ・ノヴェラ教会が先ず控えている、建築家アルベルティの設計による美しい色大理石で幾何学模様を彩られた優雅なその姿にミケランジェロが「おおわが花嫁よ」と感歎したといわれる聖堂に最初の挨拶を受ける。若しそこにタクシーやオートバイが走っていないかしたら自分も中世紀の一人になった感慨をもつことだろう。その左手の建物の屋根を越して花の聖母マリヤ、サンタ・マリヤ・デル・フィオーレ寺院の赤褐色のドームとジョットーが作った鐘楼の先がクッキリ見えた。そのほんのわずかな印象的構図が花のフィレンツェ！といった気持を更に抱かせる。それを目当てに狭い商店街をたどってゆくと八角形のサンタ・ジョヴァンニ洗礼堂と、その名にふさわしい白淡紅濃青黒の大理石の合奏が花の聖母の讃歌を韻々とトスカーナ全土に響かせているではないか。これぞフィレンツェの要ならんと大伽藍を仰ぎ見た。百年を越す年月で築かれた一〇七層のこの円屋根はトスカーナ全土を覆わんものとの念願でブルネレスチが骨身を砕いての設計で始まり、一四六一年ギヴェルティによって正にその念願通り完成された豪華壮麗の聖堂である。堂内にはミケランジェロのピエタ、ウッチェロ、カスターニョの名作がある。この大聖堂を取りまく民家が意外にも近く迫っているのが建築全体の大きさが捉め難い憾みがあった。そこから路地のように狭い街路が八方に放たれ、苔こそ生えてはいないがその石畳の古さは踏みつぶされた凹面や黒光りのした色が古都の奥深さを身にしみ込むように伝えてくる。そんな通りを五分程歩いたところにメデイチ家の教会サン・ロレンツォ聖堂があり、隣合せにミケラ

あなたの気持で搬入出、

東京の公募展へは当社を……………

取扱
材料運
送
搬入
出
貨
洋
荷
画
造

東光美術社

東京都足立区千住旭町17 TEL (881) 2684番

ンジエロの昼、夜、朝、夕に飾られたメデイチ家中興の祖ジュリアノとロレンツォの霊廟がある。冷んやりとした地下室のような感じの一階から階段を上ってゆくとジュリアノとロレンツォが向き合い、その間の壁面に聖母子と聖者の三体が安置されてある。私の他には女画学生が一人大きなカルトンをかかえてデッサンをして居るのみ、私の靴音が気になる程天井に反響する静けさである。ライバルのラファエロを意識して制作したと伝えられる覇気に富んだ中期の作品で、この巨匠の名作に守られながら眠るメデイチ家の霊廟こそロレンツォの中心ではないかと又しも感激しながら外に出た。その足でリッカルディ宮の壁に照りかえる陽ざしをあびながらサン・マルコ広場に行く。サヴォナローラを生んだサン・マルコ寺院に続いてフラ・アンヂェリコの受胎告知のあるサン・マルコ修道院、ロレンツォ大学とアカデミア美術館等に囲まれたこの広場もロレンツォの重心でなからうか。衆知のようにアカデミアにはミケランジェロのダビデをはじめ完成、未完成、習作などが陳列してある。その中にはコッピもあがるが、それらの高潮が襲いかかってくる様なミケランジェロの気魄に圧倒されてしまう作品の数々が静かな空気の中に輝いているところにもルネッサンスの栄光を感じずには居られない。私はロレンツォの精神比処にありと感銘したものである。その後ミラノの美術館でミケランジェロ最後の作「ロンドンダニーニのピエタ」を見た時はこの巨匠の数々の名作にそれぞれ強い感銘を受けたがこの絶作に接した時程感極まったことはなかった。人生の終幕が上りかかった頃のこのピエタには昇華された精神の澄み切った美しさが在るのみで、誰にともなく頭が下ってしまう崇高な感情に純化されていったことをまざまざと思い出す。

ロレンツォ市の中央、アルノ河の近くにシニョリア

広場がある。ルネッサンスの当時から今でも市民の集まるロレンツォの広場でシニョリアとはロレンツォ共和国の委員との意味であるとか、その政庁であったヴェッキオ宮、イタリヤ最高のと言っても過言ではないウフィッチ画廊、槍騎兵親衛隊を駐屯させたロッジ・ディ・ランツィ等が実に堂々と往時の権力と財力をなびかせて建ち並び、ミケランジェロのダビデ（模作）アンマナーティのネプチューンの噴水、バンディネリリのヘラクレス、ドナテルロ、チェリニとその他の彫刻が配置されていて正にルネッサンスの殿堂である。サヴォナローラが焚刑になったのもこの広場で、ロレンツォの多端な歴史のしみがこの広場の石畳には深く滲み込んでいることだろう。

アルノ河の対岸のオリウや糸杉に程よく囲まれたミケランジェロの丘はロレンツォを目下にトスカーナ平原を一望の下に眺められる景勝の台地でミケランジェロのダビデと昼夜朝夕のプロンズ像が建っている。河の向いにはミケランジェロや作曲家ロッシーニ、ガリレオ・ガレリイの墓がある。サンタ・クロッチェ教会その近くにミケランジェロが住んでいたカーサ・ブオナローティがあり、左に国立美術館ヴェッキオ宮の塔、遠くにジオットの鐘楼と花の聖母マリヤのドーモが褐黄茶紅赤の屋根瓦の上に浮び、ダンテが初めてベアトリッチェと出会った二階建てのヴェッキオ橋がアルノ河をまたいでいる。更に左にはボボリー公園の森がピッティ宮を包むようにおおって黄色い壁や茶褐色の屋根を一層美しく効果づけている風景である。私は幾度かこの丘に立って花の都ロレンツォの涯知らぬ雅やかな饗宴をダンテの詩に託して口ずさんだ。「ロレンツォよ歎べ。汝はいと偉大にして、海に陸に翼を搏ち、また汝の名は地獄にひろがる」と。



羽幌炭砒鉄道株式会社

取締役社長 町田 叡 光

札幌市大通西5丁目大五ビル TEL ② 9151